

Educco

地球時代の教育情報誌 エデュコ

No.28

2012年 春

2 巻頭インタビュー
アナウンサー

山根 基世さん

4 知っておきたい教育 NOW

「道徳」教育に新学習指導要領をどのように生かしたか

徳満 哲夫

むかしのお話を読む

竹内 孝彦

8 きょういく見聞録

震災が突きつける子どもの貧困問題 —被災地での学習支援—

大橋 雄介

10 地球となかよしトピックス

平戸オランダ商館

長崎県平戸市

12 インフォメーション 北から南から

14 地球となかよしゼミナール

優しさを届ける子どもたち

北区立堀船小学校

15 コラム いまどきコドモ事情

先生たちの元気を保つために

香山 リカ

16 ほっとな出会い

金管五重奏団

ズーラシアンブラス





有限責任事業組合「ことばの杜」代表／アナウンサー

山根 基世さん

よい人間関係を築き、
自分の頭でものを考えるために
言葉の力を信じる子どもを育てたい



PROFILE

山根 基世

1948年山口県生まれ。県立防府高校、早稲田大学文学部卒業後、NHKに入局。「新日曜美術館」「小さな旅」などに出演、大河ドラマやNHKスペシャルのナレーションも務めた。2005年、女性初のアナウンス室長に就任。2007年NHK退職、松平定知氏らと共同で「ことばの杜」を設立。放送経験を生かした様々な活動を行っている。

NHKを退職後、「ことばの杜」を立ち上げられました。

定年を迎える2年ほど前ですが、子どもたちの、一瞬の激情に駆られた、取り返しのつかないような事件が多く発生していました。文科省の、児童生徒の問題行動等の調査結果でも、暴力行為の増加が目立ちました。いろいろな社会背景がありますが、原因の一つとして、自分の気持ちや言葉で表現できない、言葉によって周囲の人と良い人間関係を築く力がないといった、言葉の力の欠落が指摘されていました。

そこで私は、多くの話し言葉を担い、言葉のノウハウを蓄積してきた集団であるNHKのアナウンス室長として、子どもの言葉を育てる社会貢献をしていくことができるのではないかと考え、活動を始めたのです。現在もNHKの取り組みは継続していますが、現役のアナウンサーはなかなか時間がとれません。ですから、私たち定年を迎えた者が、取り組みを外から支える仕組みをつくりたい、私たち自身が、子どもの言葉を育てる活動をしなくてはならないという思いで、「ことばの杜」をつくったんです。

「ことばの杜」では、朗読、言葉の講座、教材開発、指導者支援などを活発に行っていますね。子どもたちに伝えたいことは何でしょうか。

自分の気持ちを言葉できちんと表現できること、そして、相手の言葉を聞くことによって相手の心を理解できることが大切だと思います。そうして、いい人間関係を築くことにより、自分らしい納得のできる人生を切り拓く力を持つということ。人間力としての言葉の力を持つてほしいということが一つです。もう一つは、言葉の力を信じる子

どもを育てたいということです。

日本人は、どうせ私一人がやっても世の中は変わらないとか、俺一人がやっても世の中の何の役にも立たないとか、最初からあきらめている人が多いんですね。でも、そうではない。社会に向かって、いいことはいい、だめなことはだめと発言していくことによって、世の中を変えることができる。そういう言葉の力を信じる子どもを育てることが、民主主義を成熟させていく第一歩だと思います。

言葉は、思考の道具でもあります。美しい日本語、正しい日本語を伝え

ていくということも、もちろん大事ですが、それが第一の目的ではないんです。私たちが一番望んでいることは、自分の目でものを見、自分の頭でものを考える子どもを育てるということです。

話す力、聞く力を培う「場」の重要性を説いておられます。

「ことばの杜」設立から5年、痛切に思っているのは、子どもたちの言葉を育てるためには、「地域社会」を再建することが非常に重要ではないかということです。

人間は、8歳ぐらいまでの言語形成期に、声の出し方や、どういう言葉でコミュニケーションするかを、周囲の大人の言葉を聞いて、後天的に身につけていきます。ですが、現代社会は核家族で、以心伝心、主語述語を整えずに、限られた名詞のやりとりだけで家族の会話が済んでしまう場面も多いんですね。地域社会が機能している時代には、冠婚葬祭やお祭りなど、多世代が一同に会し、一緒に行動する場がありました。そういう中で、子どもたちは、人間がその場によっていかに振る舞い、人間の関係が変わると言葉がどう変化

するかを学習していったんですね。こういうことは、学校で教えて身につけるのは難しいと思います。

今の子どもたちは、ネットでの発信や情報収集には慣れていきますし、デイスカッションやレポートなど、みんなの前で堂々と発表することにも長けています。ただ、日々の暮らしの中で、隣の人とどう心を通わせるか、という経験が少ない気がします。そうすると、知識としての言葉はあっても、言葉が人を傷つけるとか、傷つけたと思ったときにどうすればいいのかという、生きるうえでの基本が身につけにくいですね。毎日の暮らしの中で、小さな満足感を重ね、隣人と心を通わせなければ、人は幸せに生きていけない。そのため力を蓄えることが大切なんです。

とてもいい言葉を聞いた後には、おいしいごちそうを食べたのと同じような感動があります。言葉って気持ちいいものなんだ、おいしいものなんだということをお大人がちゃんと体験させてあげることが大事。ですから、お互いが心地よく生きていくための新しい絆、もちろん昔のムラ社会のような窮屈なものではなく、多世代が交わる新しい空間を

つくり直すことが必要ではないかと考えています。

お祭りでも朗読会でもいいですから、様々な人が集まり、言葉を交わし、その中に子どもの言葉を育てるという意識をどこかに持っている、そういう場を全国津々浦々につくる。それが今、私の一番やりたいことなんです。

朗読活動にも力を入れておられます。

黙読ももちろんすばらしいんですが、肉声で語られたときに、まるで違う世界が立ち上ってくるんです。

朗読とは、単に文字を音にすることではありません。ここに書いてあることは何なのか、作者が言いたいと思っているその心は何か。ここに句点、読点を打っている意味を考え、受け止める。そして、それをそのまま流すのではなく、相手の心に届くように読むには、どういう工夫がいるのか、どうすれば届くのかを考える。それが、朗読なんです。

最近、学校でも朗読が盛んに行われていて、とても喜ばしいことです。小学校でも古典を扱うようになったのですが、古典は、言葉のリズム、響きといった日本語の美しさが凝縮

されています。ですから、言語形成期に、体にしみこませておいてほしいですね。古典や、島崎藤村の詩のような、リズムや響きが完成しているものは、みんなで一斉に音読するのもいいでしょう。

ところが、近代化された後の新しい日本語、現代文は、みんなが一つの息で読める文章ではありません。意味を伝えるための文章になっていて、書き手の息の長さも、読み手一人一人の息の長さ、受け取り方も違います。ですから、一斉の音読には向きません。「きょうー、私のー、庭にー、赤いー、花がー、咲いたー」という感じで、文節ごとに切って、語尾を伸ばさなければ一緒に読めないんです。作品選びには慎重であってほしいと思います。

私も今、大学と協力してテキストづくりに取り組んでいます。朗読活動には、教える側、子どもに読んで聞かせる側の見識が非常に重要になります。先生たちや、朗読ボランティアがきちんと学べる場もつくってきたいですね。

「ことばの杜」ホームページ
(朗読を聴けるページもあります)
<http://www.kotobanomorji.jp>

新学習指導要領(小学校)

「道徳」教育に新学習指導要領を どのように生かしたか

— 全面実施から1年を経過して —



東京都渋谷区立臨川小学校 校長
徳満 哲夫

新学習指導要領の改善点

今回の新学習指導要領における道徳の改善点は、①発達の段階に応じた指導内容の重点化、②児童生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用、③道徳推進教師を中心とした指導体制の充実、④道徳の時間の授業公開、家庭や地域社会との共通理解・相互連携が挙げられる。指導内容面の重点化として、特に小学校では「あいさつなどの基本的な生活習慣」、「人間としてしてはならないことを

しないこと」、「集団や社会のきまりを守ること」が示されている。

臨川小学校の道徳教育

創立百三十五年を迎える本校であるが、単学級で全校児童百五十名程の小規模校である。公立幼稚園と特別支援学級が併設され、外国籍児童も多い。個性豊かな児童たちであるが、生活面・学習面での課題も多い。

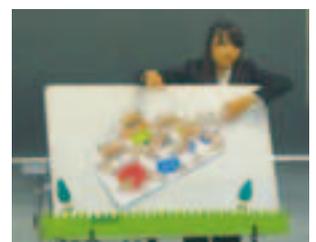
平成二十三年度から「しなやかな心を育てる道徳教育」を研究テーマとして校内研究に取り組んでいる。新学習指導要領の改善点を踏まえ、道徳の時間の指導の充実、教育活動全体を通して行われる道徳教育の充実、家庭や地域との連携の充実を目指して、二年目の研究に入ったところである。

道徳の時間の指導の充実

東京都では、道徳授業地区公開講座全校実施が十年目となる。道徳の時間の指導について各学校でも理解は進んでいるが、様々な指導方法も混在し、道徳の時間の基本から離れてしまう授業もまだある。

本校の研究を進めるにあたっては、道徳の時間の意義、特質から改めて基礎・基本に立ち戻り、指導の工夫を行った。昨年度は、指導過程の理解を中心に、特に資料の選定・提示方法について工夫した。道徳の時間は資料を通してねらいとする価値を追究する。共感

の原則に基づく資料提示は展開前段の核となるものである。資料の状況、背景の理解に基づく共感、その中で主人公の気持ちに対する共感を高めることが何よりも大切である。読み物資料では教師の範読が中心となるが、共感を高める指導の工夫は様々に考えられる。



研究授業を通して、低学年では具体物の提示やパネルシアター、教師の演技による劇化、中学年では写真や効果音、電子黒板の利用、高学年ではビデオ利用による補助資料の活用等、それぞれの発達段階に応じて様々な工夫を取り入れた。教師も資料提示の大切さに気づき、研究授業の回が進むにつれて、より工夫を凝らした手法が紹介された。

今年度は、発問の精選、話し合い活動の工夫、価値の自覚化の工夫等、さらに質の高い道徳の時間の指導を目指している。

年間三十五時間、週にわずか一時間の道徳の時間であるが、道徳教育の要として一時間一時間を大切にしているという教師の意識の変化が見られている。

道徳推進教師が自ら三回授業提案を行い、他の教師へのよい意欲づけともなった。今後は、教師自身が魅力的な道徳の時間の資料を開発していくようとする意識も高めたい。

全教育活動を通して行われる道徳教育の充実

道徳教育は全教育活動を通して行われる。これまでも道徳の全体計画をもとにその姿を示してきた。今年度からは、特に全体計画の別葉として、各教科における指導内容との関連を明らかにした。専科の教員による授業提案も実施した。各教科には教科のねらいがあるが、それは道徳的価値と深く関連している。また、体育での協力、ルールの順守、音楽における器楽練習やハーモニーの調べ、保健指導における健康安全教育等、道徳的価値のまさに実践の場である。教師は、各教科における道徳指導を意識することで、補充、深化、統合する道徳の時間の指導の特質が一層明確化された。

また、本校では「やさしさ教育」として、学年を通して体験活動による学習を計画・実践している。低学年では、犬たちとのふれあい活動、中学年では視覚障がい、聴覚障がいの方を招いた交流会、高学年では車椅子体験や高齢者疑似体験、保育園交流を年間計画に位置付けている。また、併設されている幼稚園や特別支援学級との交流会もすべての学年で実施しており、さまざまな人とのかわりや体験活動を通して、思いやりの心の育成を行ってきた。「臨川小の子どもはとてやさしいですね。」と言われる現在である。

基本的な生活習慣の定着を目指して

あいさつや言葉遣い等の基本的な生活習慣の定着については、日々の学校生活の中で、教職員の共通理解の下、身に付くまで繰り返し、継続的に指導していかねばならない。本校では、これまで表現力の育成に重点を置き、授業中の発言等に関する話型、日常生活における話型を利用した指導を大切にしている。「しつれいします。」「ありがとうございます。」「生活の場での礼儀正しい言葉遣いも徐々に定着してきている。」

また、あいさつに關しても課題があった。学校外部評価では、本校のあいさつの定着が低い評価であった。そこで六年生が中心となり朝の「あいさつ運動」が展開され、二年目に入っている。朝八時から十五分間、正門前に登校した児童から並び、下級生に大きな声で「おはようございます。」と声かけをしている。雨の日も風の日も、雪の日も休むことなく続けている。現在では五年生や他の学年の児童も自主的に参加し、今年度の学校評価でも、「あいさつ」に関しては、評価が上がった。そのほかにも、六年生は雨の日の「かさ立て整理運動」や毎日の「くつそろえ運動」も継続している。「ぬいだはきもの



はあなたの心が残されている。」「心がそろえばはきものもそろう。」を合言葉にしている。

靴箱は学校の顔であるとして繰り返し指導し、六年生のちよつとしたお手伝いで、自ら整頓された靴箱が当た

り前の毎日として定着しつつある。

今後も日常での生活指導の充実により、基本的な生活習慣の確実な定着を図り、学びの場としての学校生活を構築していきたい。

家庭や地域との連携を深める

昨年度、道徳教育を校内研究に取り上げている。家庭や地域との連携は不可欠と考え、学校だよりや学級通信等で授業の実践について紹介している。基本的な生活習慣の定着においても、家庭との連携は極めて重要である。

校内掲示や教室掲示でも道徳の時間の指導の様子を伝えている。学校生活での児童の変容に応じて、道徳教育の重要性についても保護者、地域の理解が深まってきている。今年度は年に二回の道徳授業地区公開講座を予定している。「しなやかな心」の育成に向け努力していく。



新学習指導要領(小学校)

むかしのお話を読む (小一・小二)

— 伝統的な言語文化を学ぶに当たって —



千葉県船橋市立海神南小学校 教諭
竹内 孝彦

新学習指導要領をどう反映したか

新学習指導要領には、「伝統的な言語文化は、創造と継承を繰り返しながら形成されてきた。それらを小学校から取り上げて親しむようにし、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるような内容を構成している。」と、その指導の重視すべき理由が述べられている。

年少の児童は、記憶力に優れ、繰り返しを好む。短歌や俳句、ことわざ、詩、古典の冒頭などを繰り返し読み、かきたてにして遊んだりするうちに、いつの間にかそらんじることが

ことができる。本校では、古今の詩文を集めた『ドラゴン詩歌集』を作成し、朝の会や十五分間の「言の葉タイム」で唱えている。

この度は、教科書に掲載されている『いなばの白うさぎ』を、単に読むだけでなく、広く昔話や神話の読書に誘いたいと考え、本単元を設定した。

教材について

昔話や神話・伝承は、国の始まりや形成過程、人の生き方や自然などについての古代からの人々のものの見方や考え方が、長い歴史の中で、口承だけでなく、筆記された書物として現在に引き継がれたものである。

昔話は「むかしむかし、あるところに」などの言葉で語り始められる空想的な物語であり、特定または不特定の人物について描かれる。「桃太郎」では力を合わせて悪いものを打ちほらい、「花咲翁」では正直者が幸を受け、「一寸法師」では小なりとも大に立ち向かい、「猿蟹合戦」では悪さをすればいいには減じる。そのなかに生きる知恵が語られている。話の展開はわかっている、読み返すたびに琴線に触れるものがある。

また、これらは唱歌と一対になっている。桃太郎は一番から四番が起承転結の構成になっている。花咲翁は、正直翁さんと意地悪翁さんが交互に登場する。唱歌を口ずさむことで、物語を回想できる楽しみを得られる。

「神話・伝承」は、一般的には特定の人や場所、自然、出来事などと結びつけられ、伝説的に語られている物語である。

神話には神々の物語が語られている。神話には、高らかな笑いがあり、深い嘆きがあり、あやまちがあり、また、それを見直す寛大さがあり、小さなことによくよしがちな心を解き放つような力がある。スケールの大きな話を声に出して読むことで、元気を得ることができるだろう。

これらを基にした本や文章を活用して読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすることになるが、教科書には紙数の都合でその一部の文章が掲載されるくらいだろう。資料として備えておくことが欠かせない。そして、数々の書き換えられているものなかで、どれが優れているのかを吟味しておくことも必要である。

実践一 神話を演じよう(小一)

《本単元でつきたい力》

・昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすることができる。

《授業の実際》

参考文献を基に、古事記を、国生みの段から因幡の白兔の段まで台本にしてみた。好きなどころを選ばせても、はじめから限定した場面を取り上げてもよいかと思う。本実践では、班ごとに好きな場面を選ばせて、劇やパ

ネルシアターなどで演じることにした。

台本を覚えるほど読み込ませることで、児童は自ら調子よく語るができるようになってきた。身振り手振りをつけたほうが覚えやすいことを話すと、役になりきって相手を想定しながら語っていた。「想像を広げながら読む」という目標に、近づくことができた。個人練習とグループ練習とを重ね、台本の最後まで通るようになったところは、次の段階に進ませた。劇を選んだ班には、衣装や小道具を与えた。パネルシアターを選んだ班には、パネルの前で演じさせた。すると、さらに自分たちでも衣装や小道具を考えながら、想像をふくらませていった。

フロアーのお客さんに、せりふを唱和してもらおうという参加型の劇を考える班も出て、親への発表会に向け、意欲的に取り組んだ。

【児童の感想より】

○わたしのぼんで、せりふをいいながらパネルにはるところがむずかしかったです。
○六年生に見てもらいました。「うごきをつけたほうがいいよ」といわれました。やっているうちにできるようになりました。

実践二 昔話・神話の紹介かるたを作ろう(小二) 《本単元でつけた力》

- 昔話や神話・伝承などの本や文章を読んだり聞いたりする。
- 読んだ本について好きなところを伝えた

り、かるたの形にして紹介したりする。

《授業の実際》

本単元に先立って、童話作家の福永真由美さんに、著書『わが子に贈る日本神話』（展転社刊）より「島々のはじまり」について話をしていただいた。本書は、平易でかつ格調が高く、読み聞かせるのに最適であると思う。

次の日より、昔の話の読書マラソンを始める。船橋市内のネットワークから本を五十冊ほど集め、昔話神話コーナーを設置した。

集めた本は、次の十五話と古事記である。

浦島太郎 一寸法師 桃太郎 鶴の恩返し
猿蟹合戦 金太郎 花咲翁 舌切り雀
瘤取り爺さん お結びころりん かぐや姫
傘こ地蔵 かちかち山 鼠の嫁入り 文福茶釜
古事記(島々の誕生・八岐大蛇・天の岩戸・
大国主命)

児童は、次々に本を手に取り読み進めていった。黒板には、模造紙を貼り、今、誰がどの話を読んでいるか記している。読み終わったら、ワークシートに、①お話の題名 ②登場人物のしたこと ③紹介したい場面 ④気に入った場面の五七五作文を書き込んでいく。

一年生を招き、班(一班四人)ごとに昔話や神話の本の好きな場面を紹介した。次に、五七五作文で作ったかるた取りをして楽し



せていた。このかるたは、次年度の児童の読書活動の導入として大変有効であると考えられる。大切に保存しておきたい。

どんな力がついたか

まずは、昔話や神話へと読書の幅が広がったことである。普段の読書では、「かいけつゾロリ」「マジックツリーハウス」などに集中していたのが、昔話や神話の本を自ら手に取って読もうとする児童が増えた。

また、お話を劇化させることで、登場人物の行動を中心に、想像を広げながら読む力を伸ばした。好きな場面を五七五にして紹介させることで、文章の中の大切な言葉や文を書き抜く力を育めた。さらに、敬語や漢字表記、普段なじみのない言葉に、楽しみながら触れることができたことも大きい。

学校のある海神地区には「龍神社」があり、古くから海の神様が祀られている。龍神社には、弘法大師にまつわる伝承なども残っている。昔話や神話に親しむことで、このような、自分の住む地域の歴史や伝承などにも思いをいたすことができた。そこから、郷土についても関心を深めていけると考える。

今後、多くの実践に学びながら、より確かな力を育める授業づくりに励みたい。



済的に裕福ではなかった家庭、頼るべき人がいない家庭ほど取り残されていく現実である。

自力で生活を再建できる余力のある家庭、中でも小さな子どもや受験期の子どもがいる家庭は、早くから避難所を出て、賃貸住宅に移り住んでいた。ある避難所で簡単な調査を実施したところ、子どもがいる家庭の2/3は、震災前の年収が200万円～400万円であった。『3・11被災地子ども白書』を刊行するために実施した調査でも、失業や減給に直面していた家庭の多くは、地元の零細企業の社員や自営業者であった。さらに、家賃の立て替え*2ができずに、借り上げ住宅を断念して仮設住宅に入ったという声もあった。

つまり、この震災の本質は、元からの困窮者を「取り残された被災者」という形であぶりだしているという点にある。見方を変えれば、元からセーフティネットができていれば、仮に同じ被害を受けても、その影響は最小限にとどめることができたはずだ。天災の中に、人災の側面があったと言え、言いすぎだろうか。しかし、これまで私たちがきちんと目を向けてこなかった問題が、震災という有事によって表出してきた側面はある。であれば、私たちは、この震災を被災者たちが提示してくれている教訓として真摯に受け止め、今回を契機として、元から存在していた問題に取り組んでいくべきではないか。

● 6.3人に1人の子どもが、貧困という現実

「これまで目を向けてこなかった問題が表出してきた」と書いたが、では、どういった問題が日本に存在していたのか。それは、日本における子どもの相対的貧困率の高さである。厚生労働省が発表した最新のデータでは、15.7%に及ぶ。およそ6.3人に1人という割合である。

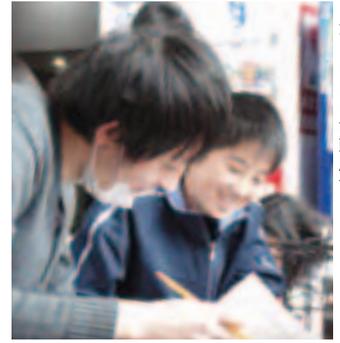
相対的貧困とは、やや単純化した言い方になるが、その社会の一般的な所得の半分以下で生活している状態。ほぼ、生活保護の水準と近い。そういう状態で生活していた子どもが、これだけ膨大な数で存在していたのである。

相対的貧困は、戦後の生きるか死ぬかといった貧困（絶対的貧困）と比べて、非常にわかりづらい。

*2:入居から審査までのタイムラグがあるため、その期間は入居者が立て替えをしなければならない。

携帯電話や iPod を持っていたりする。目に見えにくいともいわれる。

だが、マクロ的に見れば、その実態が明らかになる。たとえば、世帯所得と子



どもの学力には明確な相関関係が存在する。なぜ、そのようなことになるかと言えば、現代日本において、学校外教育費の、教育費に占める割合が非常に高いことが一つ（政令指定都市の公立に通う中学生で70%、公立の小学生では73%）。もちろん、問題は経済的事情による直接的な教育機会の制限だけとは限らない。たとえば一人親家庭で、子どもの勉強を見てあげる時間的、精神的な余裕がない。あるいは居住環境が良好でないために家で勉強できる環境がない。保護者も中卒・高校中退といった学歴で、子どもに対する学習への意識付けがされにくい。このような、多様な要因が影響しているといわれる。いずれにせよ、お金の有り無しが子どもの学力を左右し、学力の低い子どもは課題の多い学校へ進学する確率も高い。中退率も高く、学歴とフリーターになる確率、生活保護受給者となる確率は明らかに関係している。つまり、どの程度の資力をもつ家に生まれたかによって、子どもの将来が大きく影響を受けている。

以上は一つの切り口に過ぎない。しかし、これが経済成長という言葉に踊らされ、過去に1億総中流と謳われた日本がたどり着いた姿である。こういった矛盾、ひずみが、今回の震災によって、ベールを剥がされ、私たちに挑戦的なまなごしを投げかけている。再びベールをかぶせて見なかった振りをするのか、それとも果敢に挑み返すのかは、私たち一人ひとりの意志の問題である。

NPO法人アスイクでは、震災によってあぶりだされたこの巨大な問題に対して、現場での直接支援を続けるだけでなく、遠隔教育にも取り組み、社会的なインパクトと継続性を備えた事業を展開していきたいと考えている。

NPO法人アスイク <http://asuiku.sendai-net.com/>
 仙台市宮城野区榴岡 5-3-21-101 TEL. 022-781-5576

きょういく 見聞録

震災がつきつける 子どもの貧困問題

— 被災地での学習支援 —



NPO 法人「アスイク」は、東日本大震災の2週間後に、仙台市で立ち上がった教育支援組織である。震災直後から、学習ボランティアや様々な組織の力を結集し、避難所、仮設住宅、さらには民間の借り上げ住宅で生活する子どもたちを、主に学習面からサポートしてきた。また、現場を起点としてより大きな動きを生み出していくために、2011年12月には『3・11被災地子ども白書』（明石書店）を刊行している。

震災から1年余り。ひたすら現場で活動が続ける中で直視してきた、震災が私たちにつきつける現実をお伝えしたい。

NPO法人アスイク 代表理事 大橋 雄介

● 震災による学習遅れに対応するために

私たちが被災した子どもの学習支援活動に乗り出したキッカケは、ある会議で行政が提供した一つの情報だった。「相当数の学校が使えない状態になっており、いつ学校が再開できるか目処が立っていない」。その情報を聞いたとき、直感的にこれから起きうる問題が脳裏を駆け巡った。3月中下旬の追い込み時期の授業が抜け落ち、さらに学校再開までの期間、学習から遠ざかることによって、学習遅れが深刻になる。家庭内で自主学習ができる環境にある子どもたちは何とかなっても、避難所生活を送っている子どもたちは、自力でキャッチアップできなくなる。そのような問題意識に突き動かされ、震災によって子どもが負ってしまうハンデを少しでも減らすことを目指し、避難所の中での学習サポートに乗り出した。

しかし、食べるものすらままならない混乱状態の中で、このような活動がすんなりと受け入れられるはずもなかった。避難所だけでなく、時に保護者、子どもからも冷たい反応を返される。当時はガソリンもなかったため、自転車で避難所を駆け回って提案活動をしていた。自転車のペダルを漕ぎながら、「自転車も最初のひと漕ぎに一番力がかかる。でも、

一度車輪が回り始めれば、後はもっとラクに進むことができる」と自分を奮い立たせていた。

果たしてそれは現実のものとなった。様々なハードルを乗り越え、団体を立ち上げて1週間後の4月3日、仙台市内の避難所で第1回目の学習サポートを開始。地元誌にも取り上げられた結果、学習ボランティアを希望する人たち、物資等の提供者が次々と現れ、私たちの活動は一気に軌道に乗り始めた。

● 問題は、元から存在していたという気づき

4月から6月の3カ月間で、活動場所は4市町9カ所の避難所、実施回数59回、参加した学習サポーターは延べ308人、参加した子どもは延べ444人という定量的な成果を残した。7月からは、仙台市内、多賀城市の5カ所の仮設住宅に活動の軸足を移行。一方、仙台市内は仮設住宅が1500程度であるのに対し、民間の借り上げ住宅^{*1}が8000戸弱あり、さらにその1/4は市外からの転入者といわれる。より社会的な孤立に陥りやすい借り上げ住宅で生活する子どもたちの受け皿として、9月から直営の学習支援センターの立ち上げに踏み切った。

このように被災した家庭と接し続ける中で、私たちはある現実気づいてしまう。それは、元から経

*1: 民間の賃貸住宅への入居に対して、行政が家賃補助を行う形態。

長崎県平戸市

平戸オランダ商館

長崎県北西部に位置する平戸市。2011年9月、オランダ貿易港当時の倉庫を忠実によみがえらせた「平戸オランダ商館」がオープンしました。平戸オランダ商館の倉庫は、約400年前に造られた日本初の西洋建築物でしたが、幕府の鎖国政策によって、わずか1年で壊された過去を持ちます。

かつて「西の都」と呼ばれた、外国貿易港の平戸。子どもたちは、日常生活の風景に歴史遺産が溶け込む中、世界にひらかれた交流の空気を身近に感じています。



平戸オランダ商館は、1609年に江戸幕府から貿易を許可された東インド会社が、平戸に設置した、東アジアにおける貿易拠点で、複数の大規模な倉庫や住宅、埠頭などで構成されていた。復元された「1639年築造倉庫」の正面には、「1639」の年号と、東インド会社の「VOC」のロゴが輝く。

「本物」で歴史を体感

社会科の授業の一環でオランダ商館を訪れたのは、市立田助小学校の3年生12名。オランダ人の平戸市国際交流員、レムコー・フロライクさんが往時の商館員の服装で登場すると、「レムコー先生！」と子どもたちは大喜び。レムコーさんは、市内の各小学校に出向いてオランダと日本の交流などのお話をしてくれており、親しみやすい語り口が市民に大人気なのです。

忠実に復元されたオランダ商館の構造と、所蔵の「本物」の史料を真剣な目で見つめる子どもたち。自分たちの住んでいる町が、大昔からこんな華やかな交流を行っていたことに、驚きと喜びの声が上がります。

学芸員の前田秀人さんは子どもたちの様子に笑顔です。「今は、難しいことは覚えなくてもいいんです。身近に昔からすごいものがあるんだな、と感じて、将来、勉強したり本を読んだりするときに思い出して、そこから興味を深めてもらえればと。子どもたちの純粋な興味を大事にして、歴史を学びたいという気持ちにつなげたいと思います。」

世界にひらかれた我が街

平戸市内の各学校では、子どもたちの発達段階に合わせて、平戸の歴史、諸外国とのかわりについて継続的に学んでいます。

2000年からは、日蘭交流400周年を記念し、毎年オランダ人の芸術家を平戸へ招



オランダ商館長と日本人女性との間に生まれ、鎖国政策でジャカルタに追放された女性「コルネリア」の数奇な生涯について、国際交流員・レムコーさんの説明に聞き入る子どもたち。



自分たちの知る世界地図と古地図とを比べて興味深げ。オランダ商館では、古地図などの常設展示の他、オランダ大使館や松浦史料博物館などの協力を得た特別展示を随時行っている。



商館のマスコットキャラクター「オランダかびたんず」と一緒に。外国貿易当時より、平戸の人々は、オランダ商館長のことを「カピタン」と呼んでいた。

○問い合わせ先
平戸オランダ商館
長崎県平戸市大久保町2477番地
TEL 0950-26-0636



復元された約50cm四方の巨大な柱は、樹齢700年相当のものを使用。オランダの建築様式によく見られる造りで、インドネシアなどにも同様の様式の建物が残る。復元にあたっては、天井を一部スケルトンにして、構造がよく見えるようにしている。



復元した建物は、貿易倉庫としての役割を果たしていた。荷物を屋外から倉庫の階上に引き上げる「巻上機」では、当時の人々の知恵を体感。

世界に誇れる郷土！

平戸の子どもたちは、毎日の通学や外出のときに、石積みのオランダ橋やオランダ堀、ザビエル教会などを身近に見て育ちます。子どもたちにとっては当たり前風景ですが、すべて世界的にも貴重な遺産。「自分の住む街を深く知ること、このふるさとで生きていきたい、と誇りと愛着を持ってもらえたら、こんなにうれしいことはありません。」と、杉澤伸慈教育長。

黒田成彦市長も、オランダ商館を生きた歴史教育にぜひ活用してほしいと意欲的です。「復元された商館は、現代の私たちですら圧倒される、すばらしい白亜の殿堂です。平戸には、他にも当時のたたずまいをそのままに現代まで受け継いできた史跡が多く残され、まさにタイムトラベルを体験できる地なのです。市内外の子どもたちに、ぜひ国際交流の歴史を体感してほしいと願っています。」



「朝読」から普段の読書へ ～「朝の読書大賞」を受賞して～

青森県

青森市立浪打中学校校長 熊谷 せい子

浪打中学校は、青森市のほぼ中心に位置し、古くからの商店街、住宅街を学区として、63年の歴史を地域に支えられて歩んできた学校です。生徒は学習と部活動にいそしみ、卒業生も母校を誇りに思ってくれています。

中学生は、受験勉強、部活動、各種学校行事の運営・参加、青春期の悩みなど日々精一杯に生活しており、教師もその指導に多忙であるため、中学校での読書活動の推進は容易ではないと思っていました。しかし、小学校で大切にしてきた活動を中学校でも継続すること、さらに中学期に読書に親しむことの意義を踏まえて、司書教諭中心に、全校体制で取り組んできました。

始まりは朝の読書。生徒、教師が読書に集中する静寂の10分間です。しかし、その後の休み時間などにも読書する生徒の姿がごく普通に見られるようになり、さらに最近は「内読」「仲間読」を進めています。

読書活動推進の中心は司書教諭の「図書館だより」。いろいろなジャンルの本を、思わず読んでみたくなる

ような書きぶりで紹介するなど、興味深い内容の手書きA4版のもので、すでに100号を超えています。職員のお勧めの本もコメントつきで紹介されます。それらの本は、明るくコーディネートされた図書室に特別コーナーを設けて配架され、貸し出しも可能となっています。

また、市民図書館の配本を受け、学校の蔵書に楽しみの幅を広げています。短時間ながら図書室を地域に開放したり、保護者ボランティアの方も出入りしたりしていることも、読書を身近なものにすることに奏功していると思われます。

少子化の波に洗われ、本校も生徒数が激減していくのは寂しい限りですが、その中でも浪中図書委員は誇りをもって活動しています。



授業の神髄は「子ども理解」と「教材研究」

静岡県

前 静岡市立安東小学校校長 豊田 公敏

安東小学校では、平成23年度、教育学者、上田 薫先生のご指導の下に長く続けてきた授業研究会に一つの区切りを付け、新たな出発をしました。「チーム安東 共に学ぶ新研究会」と銘打って、ご参観の皆様と授業づくりについて語り合いたいと考え、新研究会を立ち上げました。

昨今、全国的に、教師の命である「授業」について研究する時間が十分にとれない現状があると思われます。本校でも、特別支援教育や各教科の内容を進めることに時間や労力が費やされ、「子どもと授業」についてじっくりと語り合うことが難しくなっています。

しかし、どういう状況になっても教師が授業を捨てるわけにはいかないというのが、本校職員の基本的なスタンスです。「ひとりひとりが生きる授業」を



研究テーマに据え、「子ども理解」と「教材研究」を柱に、子どもたちが生き生きと課題追究をして

いく姿を追い求めています。

教材研究をがっちりやり、両手に余るほどの資料を準備しても、子どもの思いがそこになれば、教師の自己満足で終わってしまいます。逆に、子どもひとり

ひとりの思いを理解していても、その子どもの思いを教材のもつ力（魅力）を借りてどう生かすかの構想がなければ、付けたい力に迫ることはできません。

授業に命が宿るのは、「子ども理解」と「教材研究」の両輪が互いを補完し合ったときだと考えます。「ハイ！ハイ！」と活発に手を挙げる子の後ろで悶々としている子どもに心を飛ばし、意図的に指名することで、その子のよさを引き出すことも可能になってきます。それは同時に、生徒指導や心の教育にも直結したものになると信じます。私たちの願いである「ひとりひとりが生きる」ことの具体がここにあります。

これからも真摯に授業を見つめていきたいと思っています。





古紙をリサイクルして あまがさきをキレイに

NPO法人あまがさきエコクラブ会長 磯田 雅司

兵庫県

あまがさきエコクラブは、2001年に市民・事務所・行政で協働の取り組みを行う「あまがさきごみ減量作戦推進会議（AGG）」からの呼びかけにより、（社）尼崎青年会議所メンバー約40名を中心に設立されました。2002年にはNPO法人（特定非営利活動法人）の認証を取得しました。

尼崎市のお店や事業所から排出されるオフィス古紙を回収・分別し、その古紙を再生資源利用トイレットペーパー（エコあま君ロール）として生まれ変わらせ、「消費型社会」から「循環型社会」への転換を目的として活動している団体です。その古紙を回収するための「オフィス古紙回収BOX」や、機密文書回収用の「機密文書回収BOX」などの販売も行っております。



また、わたしたちの活動をよりご理解いただくため、環境保全に関する講座の開催や啓発活動の一環として、尼崎市内の小学3・

4年生を対象に「出前教室」と銘打ち、わたしたちが直接小学校へ出向き、リサイクルについての「環境授業」を行っております。こうした活動が、教育出版の小学3・4年生の社会の教科書に取り上げられました。



また、新しい試みとして、職員室から出る機密文書を回収する為の金属製「回収ポスト」を市内の小学校に寄贈し、まずは6校からモニタリング中です。

尼崎在住の漫画家で、人気アニメ「忍たま乱太郎」の作者、尼子騷兵衛先生が描いてくださいました「エコあま君」（© 尼子騷兵衛&尼崎JC & NPO あまがさきエコクラブ）は、当クラブのイメージキャラクターとして、また尼崎市公認の環境キャラクターとして活躍中です。

NPO法人 あまがさきエコクラブ

URL <http://www.ecoama.jp> FAX 06-6413-5406

被災地へ届け！ 応援メッセージ

西条市立吉井小学校校長 大野 誠司

愛媛県

吉井小学校では、毎年4年生が、地域にお住まいの元山登茂郎さんの指導の下、親子で和風を作り、新年に行われる「西条市子ども凧あげ大会」に参加している。

11月に児童が作った和風には、「がんばろう日本」のメッセージを入れたものがいくつもあり、被災地で苦勞している人々を励ます子どもたちの気持ちが感じられた。そこで、4年生保護者有志が復興応援凧の制作を計画した。11月末に、のべ20人が参加して、縦115cm、横86cmの和風に「がんばろう東北」の一文字ずつを大書した7統の凧が仕上がった。できあがった和風を学校の階段に掲げていたところ、「メッセージを書き込み、私たちの気持ちも一緒にあげてもらうことで被災地の皆さんを応援したい。」との声が上がリ、文字の周りに寄せ書きをすることにした。

子どもたちのメッセージ「かなしくなったら空を見て。みんながおうえんしているよ。」「みんなが支え合っ てがんばりましょう。日本が一つのチームです。」「東北の皆さんの力強さを尊敬します。私たちにできるこ

とをしていきます。』また、保護者や教職員のメッセージ「新しい年にうれしいことが訪れますように。」「物・人・ことの復興が進み、皆さんの笑顔が明るく輝くよう愛媛西条の地からエールを送り続けます。」を載せて、1月7日、大空に7統の凧が舞った。

震災以来、みんなの心の中に、東北の方々を何とか励ましたいという気持ちがあったからこそ、凧作りから復興応援活動へとどんどん発展していったと思う。今後さらに、これを復興支援活動へと結びつけていきたい。





地球となかよし

ゼミナール



子どもたちのメッセージに学ぶ

昨年夏、『Educo』では、震災支援特別号として、全国、そして海外の子どもたちからのメッセージ集『つなごう、こころの手』を発行しました。メッセージをお寄せいただいた学校の取り組みを紹介します。

優しさを届ける子どもたち

東京都北区立堀船ほりふね小学校校長

川島 瑞穂

北区立堀船小学校は、東京23区の北、埼玉県と境を接する荒川の流れる地区に位置し、今年度90周年を迎えた小学校です。4年前から「7つの心の絆づくり」を学校のキーワードとしています。子ども同士の絆はもちろんですが、教職員との絆、地域との絆、自然との絆などのかかわりを大切にし、かかわりから育まれる優しい心を教育活動全体で育てるようになっています。

本校では、東日本大震災後、代表委員会を中心に「今、私たちにできることは何だろう」と考えました。3月末には募金活動を行いました。そして、「被災した子どもたちにメッセージを送る」という教育出版の『つなごう、こころの手』の取り組みに賛同し、全校で応募するこ



とを決めました。その中の二人の作品を紹介しましょう。3年生の小林真歩さんは、とつても元気な女の子です。2年生の時、四つ葉のクローバーをあげた

ら、けがをした友達喜んでくれて元気になったことを思い出し、被災された皆さんにも同じように元気になってもらうとお母さんと一緒に探し、写真に納めました。

尾崎杏奈さんは、物静かな女の子です。色鉛筆で50個の星を描いています。東京ではそんなに星は見えませんが、しかし、東北の空には星がたくさん見えるので

は。そんなふうに思った杏奈さんは、この星をたくさんの人に見てもらいたいと考えて50個の星を描いたのです。彼女はときどき星をお願いをしています。そして、被災された皆さんにも遠く離れているけれど願い事がかなうように「星をいっしょにみよう」と呼びかけているのです。

本校では、この二人のように、人に優しさを届けられる子どもたちを育てていきたいと考えています。全校で行っている地域の方たちとの交流、幼児との交流、様々な障害のある方との交流、外国の方との交流……。このような交流の中で、自他のよさに気づき、かかわり方を学びます。そこで得た力が子どもたちの日常生活の絆づくりに生きてくるのです。

今後心と体を大切に、共生する心と実践力をもつ子どもたちを育てていきたいと考えています。どんな時代になっても、みんなが「心の手をつなげる」ように。



●3年 小林 真歩

「つなごう、こころの手」掲載作品



●3年 尾崎 杏奈

復興支援合唱曲「みんなはひとつ」歌詞に引用



先生たちの元気を保つために



香山 リカ
(精神科医・立教大学教授)

春は学校にとっては、大いなるスタートの時期。新入学、新学年と「新」という文字があふれるのが、4月、5月だ。胸躍らせてこの時期を迎える人も少なくないはずだ。

ただ、このスタートの時期は、希望、喜びとともに、緊張やプレッシャーのときでもある。とくに子どもたちよりもおとな、つまり教師たちの中には、さまざまな心配が頭をよぎり、始まる前から心がつぶれそうな人もいるのではないかとと思われる。

もちろん、適度なストレスはよい仕事をするためには欠かせないものでもある。とはいえ、それが大きすぎると心は硬直したり萎縮したりし、結局は自分の実力を発揮できなくなったり、さらにはうつ病やパニック障害などの“心の病”が発症することにもなりかねない。それは、教師本人にとってはもちろん、同僚たちにとっても、そして何より子どもたちにとってとても不幸なことである。

ではどうすれば、教師たちが適度な緊張感の中にも、のびのびと思う存分、やる気や能力を生かす環境を保てるのだろうか。

もちろん、教師本人にも注意すべきことはある。「むやみにがんばりすぎない」を心がけ、オンとオフの切り替えをはっきりさせる。そして、休む

べきときにはしっかりと休み、リラックスやストレス解消も仕事の一環だと考えるべきだろう。また、職務上の悩みなどが生じたときには、ひとりでため込んだり「これは私の力不足なんだ」と自分を責めたりしないで、なるべく早く同僚や先輩に「いまこういうことで行き詰まっています…」と相談することも必要だ。

ただ、とくに後者、「気軽な話し合い」は本人ひとりだけの努力では実現できるものではない。そういう“環境づくり”が何より大切になる。つまり、日ごろから「きちんと休みを取ろう」「困ったことは気軽に話そう」という雰囲気を作っておかなければならない、ということだ。そのためには、宴会や旅行といったインフォーマルなつき合いを増やすのではなく、むしろ「今日は日ごろの問題を自由に話し合おう」とそのための目的に月に1度でもいいから、時間や場をきちんと設定する。最初はなかなか発言も出ないかもしれないが、回数を重ねるうちに必ず「実は…」「えー、私も同じです」といった会話がでてくるはずだ。

教師の元気をキープするためには、まず遠慮のない風通しのよいコミュニケーションを。これがスタート時期にあたって、私がみなさんにプレゼントしたい言葉である。☘



第10回★記念大会

地球となかよしメッセージ

応募期間
2012年
7月1日～
9月30日

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

作品募集
(2012年度)

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会 ◎後援(予定)/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

*2011年度の作品集についてのお問い合わせは「地球となかよし」事務局(03-3238-6864)へ。

応募のきまりなど詳しくはホームページを見てね

「地球となかよし」事務局



教育出版

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

入賞作品は Educo2013 年冬号(2013年1月発行予定)で発表します!



ほっと

な
出会い



金管五重奏団

ズーラシアンブラス

2000年、横浜市の「よこはま動物園ズーラシア」のマスコットキャラクターとして結成。メンバーは、ズーラシアに暮らす希少動物である、オカビ（指揮）、インドライオン・ドゥクラングール（トランペット）、マレーバク（ホルン）、スマトラトラ（トロンボーン）、ホッキョクグマ（チューバ）。ズーラシア園内での演奏をはじめ、全国でのコンサートは年間100回を数える。

子どもに本物の音楽を届けたい

ズーラシアンブラス結成のきっかけは、「小さな子どもに、本物のクラシック音楽を聴いてほしい」という願いです。文学における絵本のように、わかりやすいクラシックの入り口の役割を果たしたいと。通常のコンサートには、未就学児は入場できません。ですから、単なるショーや子ども向け演奏とは一線を画した、子どもが本物の音楽に「すごい！」と寄ってくるような舞台をつくれなかつ、「よこはま動物園ズーラシア」の設立時に提案したのが始まりです。ズーラシアの絶滅危惧種保護という目的と結びつけ、オカビなどの希少動物の着ぐるみ楽団としたのです。

メンバーは皆、第一線級の演奏者で、東京交響楽団や新日本フィルなどの首席奏者もいます。本物の音楽をという思いを強くもっていますから、着ぐるみをかぶって、だれが演奏しているのかわからなくても、いつも本気での演奏

です。子どもは耳がいいですから、単なる余興ではない演奏を聴くときの集中力はすごいですよ。楽譜のアレンジにも本格的に取り組んで、アーティストとしての発信力を強めています。

佳作の音楽を伝えていきたい

ズーラシアンブラスについてよく言われるのが、「着ぐるみがかわいくない」(笑)。あえて無表情にしているのは、受け手の想像を膨らませ、聴く側の心理を演奏に投影しやすい状態をつくりたいからなんです。クラシックで笑ってばかりというのは、かえって不自然。演奏が本物だからこそ、キャラクターの表情にとらわれない聴き方をしてほしいという願いです。

昨年には、オーケストラをつくりました。もちろん、全メンバーが着ぐるみです。学校の音楽の授業で、ポップスを楽しむ時間が多くなり、岡野貞一や山田耕作などのすばらしい童謡を扱う時間が少なくなっている傾向があると聞きますが、残念なことですね。ですから、オーケス

トラのテーマは「シンフォニック童謡」。簡単に受ける音楽だけではなく、佳作の童謡をきちんとしたハーモニーで演奏し、皆に伝えたい。そして、残していきたいのです。

大人と子どもが楽しさを共有

ズーラシアンブラスの活動では、親子コミュニケーションを自然発生させたいということも大きな目的です。

キャラクターショーなどでは、親はショーを見ずに、子どもが喜んでいる姿を目を細めて見ているんですが、ズーラシアンブラスでは、親も夢中になって舞台を見ています。自分が楽しいと思うものを、親が目まぐるささせせて見ている。子どもたちは、そこにすごく安心するんですね。こんなふうに、子どもと大人が同じ楽しみを共有できる世界をつくってほしい。このような親子コミュニケーションを醸成するコンセプトが評価され、昨年、「第5回キッズデザイン賞」最優秀賞を受賞しました。

頭で考える、教え込む、のではなく、ハートが揺さぶられるのが芸術です。ですから、一緒に感動する場面が大事だと思います。学校でも、音楽鑑賞の時間にレコードをかけて、先生がつまらなそうにしていたら、子どもが音楽に興味をもつことは難しいでしょう。大切なのは、大人たちが、「自分が感動する」「世界を、子どもと分かち合うことではないか」と思っています。



(取材協力・株式会社スーパーキッズ)
<http://www.superkids.co.jp/zbrass/index2.html>

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆川口淳一郎氏の巻頭インタビューは、とてもよかったです。被災している本町の子どもたちにも勇気と希望を与えるものと考えます。機会をとらえ、小中学校の子どもたちに紹介したいと思います。(福島県 神田 紀) ◆広島市の「言語・数理運用科」の取り組みに感心しました。児童生徒の関心を引きつける教材を準備し、先生方がじっくり「待つ」姿勢を貫いていることもすばらしいと思いました。ぜひ、成果を全国に向けて発信してほしいと願っています。(高知県 宮 英司) ◆第9回「地球となかよしメッセージ」の入賞作品に感動しました。特に、富士山や海、地球をきれいなという訴えには説得力があります。その子どもたちの「未来を切り拓く力」を培うために、「新しいものに気づく能力」や「新しい挑戦」を評価することを大切にしたいという、巻頭の川口淳一郎先生のご提言に共鳴しました。(山形県 佐藤 進)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進歩や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。